

結果を表す it is that 構文が認可される仕組み

筑波大学大学院 五十嵐 啓太

1. はじめに

一般に、it is that 構文は先行文に対して原因を提示する構文であるとされる(Bolinger (1972), Carlson (1983), *Cambridge International Dictionary of English*)。(1)の斜体になっている文が it is that 構文である。¹

(1) I cannot pay you back today. *It's just that all the banks are closed.*

(Koops (2007:207))

この例では、1文目で述べられている「(話し手が)金を返せない」という事態に対して、「すべての銀行が閉まっている」という原因を it is that 構文が表している。従来は(1)のように原因を表す場合が中心に論じられており、母語話者の直感からみても、この構文が原因を表すことに特化し、結果を表すことは通常ないようである。

しかしながら、大竹 (2009)によって、結果を表す it is that 構文も存在することが指摘された。例えば(2)のような例である。²

(2) I wanted to give strength to human beings so they might establish themselves as equal to Lucifer; and had I remained in the realm of the gods this would have happened at the very beginning; but the gods wanted to be the rulers on earth, so at one point they had to banish my force from their realm into the depths of the abyss. So I wouldn't strengthen human beings too strongly, and thus *it is that only from this place am I capable of sending my strong force to the earth.*

(Rudolf Steiner and J. C. McCulloch, *The Guardian of the Threshold: A Series of Soul Events in Dramatic Pictures*)

(2)では it is that 構文の先行文脈において、神が語り手の力を奈落の底へと追いやったと述べられている。その結果、it is that 構文の that 節内では奈落の底からしか語り手は地球へ強力な力を送ることができないと述べられている。it is that 構文の直前に thus が用いられていることからわかるように、(2)の it is that 構文は先行文脈で述べられている事態の結果を表しているといえる。³ただしこのことについて、大竹は事実の指摘のみ

にとどまっております、具体的な分析は行なっていない。そのため、どのような仕組みで通常は許されないはずの結果を表す *it is that* 構文が認可されるのかという点は依然として明らかになっていない。

本稿は、結果を表す *it is that* 構文が認可される仕組みを明らかにすることを目的とする。特に、Ikarashi (2012)の提案に基づいて、談話展開の中に見られる語用論的な仕組みによって、結果を表す *it is that* 構文が認可されると主張する。

本稿の構成は以下の通りである。2節では議論の前提として、Ikarashi (2012)の提案に基づいて、*it is that* 構文が認可される条件を示す。そして典型とされる原因を表す *it is that* 構文を例に、この認可条件がどのように働いているのかを考察する。続いて、提示された認可条件に基づき、結果を表す *it is that* 構文が通常認可されない理由を明らかにする。3節では2節の議論に基づいて、(2)にあげた結果を表す *it is that* 構文が認可される仕組みを明らかにする。4節はまとめである。

2. 議論の前提

2. 1 *It is that* 構文が認可される文脈

Ikarashi (2012)において、筆者は *it is that* 構文の機能として「ある命題が先行文脈から想起される命題の集合の中から選択されたことを表すマーカである」ということを提案した。この提案から(3)に示す *it is that* 構文の認可される文脈が導かれる。⁴

- (3) *it is that* 構文の使用が許されるのは、*that* 節内の命題が想起された命題の集合の中から選択されたものとして解釈できる文脈である。

以下で(3)に示した *it is that* 構文の認可条件がどのように働いているのかということ、典型とされる原因を表わす *it is that* 構文を例に説明する。

it is that 構文の使用が許される(3)の文脈に該当するのは、典型的にアブダクションという推論が生じている場合である。アブダクションとは結果を前提とし、原因を導く推論である。詳しく言うと、「探求中の問題の現象[結果]について考えられうる[...]諸仮説[原因]のリストの中から、十分熟慮して、もっとも正しいと思われる仮説を選び採択する(米盛 (2007: 68))」推論ということになる。⁵ (1)を例にとって考えてみたい。(4)として再掲する。

- (4) I cannot pay you back today. *It's just that all the banks are closed.* (= (1))

(4)では、まずお金を返せないという事実を前提として話し手が提示する。すると聞き

手は、この事実を説明し得る原因として「お金がない」「財布を落とした」「お金を返したくない」などが念頭に浮かぶと考えられるが、この聞き手が想起するであろう複数の原因が集合を形成する。そしてお金を返すことができない真の原因である「すべての銀行が閉まっている」という命題を、文脈上想起された原因となる命題の集合の中から選択されたものとして、話し手が *it is that* 構文の形で提示している。複数の原因が想起されているという点については、*it's* と *that* の間に *just* が生じていることから確かめられる。*just* は、集合の中からある要素を選び出し、他の可能性を否定するという特徴を持つ(Quirk et al. (1985))ため、*that* 節内の原因以外にも、お金が返せないことを説明し得る原因が存在し、それが否定されていると解釈できる。このように、命題の集合が想起されるアブダクションが関与している文脈では、アブダクションの結論となる命題を *it is that* 構文で表現することができる。

一方で、(4)と同じく *it is that* 構文が原因を表しているも、アブダクションが生じず、命題の集合が想起されない場合には *it is that* 構文を用いることができない。(5)のような例である。

- (5) A: The sun is going up.
B: **It is (just) that the earth is turning.*

「地球が回っているから太陽が昇る」という因果関係に基づけば、(5)の *it is that* 構文は原因を表していることになるが、この場合、*it is that* 構文が不適切になる。これは、問題となっている因果関係の性質による。通常、我々の文化圏における科学的な知識に基づけば、「地球が回っているから太陽が昇る」という因果関係は自明である。つまりこの場合「地球が回っている」という原因以外に太陽が昇ることを説明し得る原因が考えられないことになり、原因の集合が想起されない(つまりアブダクションが生じていない)。このような文脈では、*the earth is turning* という命題を *it is that* 構文で表現することができない。

ただし、(5)の *it is that* 構文も、(6)のような文脈では適切になる。

- (6) [太陽が昇る原因を、太陽が地球の周りを回っているからだと信じている人(A)に対する発話である場合]
A: The sun is going up.
B: *It is just that the earth is turning.*

A は太陽が地球の周りを回っていると信じているため、太陽が昇るという事態を説明し

得る原因として、「地球が回っている」という命題の他に、「太陽が地球の周りを回っている」という命題が考えられ、原因となる命題の集合が想起される。そして、この集合の中から適切な原因として *the earth is turning* が選択されていることになるので、アブダクションが関与しているといえる。このように、(5)と全く同じ表現形式であっても、命題の集合が想起されるアブダクションの結論として *that* 節内の命題が解釈されるのであれば、*it is that* 構文が適切になる。

このように、ある命題が、文脈上想起される命題の集合の中から選択されているものであるか否かが *it is that* 構文の容認性を決定する。

2. 2 結果を表す *it is that* 構文が通常用いられない理由

1 節で述べたように、通常 *it is that* 構文は原因を表すことに特化している。実際、(7)のように結果を表す *it is that* 構文は不適切になるが、その理由もやはり命題の集合が文脈上想起されないことに起因する。

(7) A₁: Tom looked ill when I saw him at school yesterday.

B: What did he do then? Did he go to the hospital?

A₂: No. **It's (just) that he left school early.*

(7)の *it is that* 構文はトムの体調不良の結果生じた事態として「早退した」という命題が述べられている。また、Bの発話を見るとトムの具合が悪かったという情報から推論して、「トムが病院に行った」という結論が提示されている。そのため、一見すると(7)では2つの結果が存在し、結果の集合が想起されているように思える。しかし、*it is that* 構文は不適切になる。この理由は、原因から結果を導く推論の性質によるものと考えられる。原因を前提に結果を導く場合、(8)のように大前提に基づいて結論が得られる。

(8) Premises: If it's snowing it's cold.

 It is snowing.

Conclusion: It is cold.

(Allwood et al. (1977:16))

(8)では、もともと大前提として「もし雪が降っていれば、寒い」という知識が存在している。そのため、この前提が話し手の知識として存在する限り、「雪が降っている」という原因が与えられれば、自動的に結果が得られるので、原因と結果が1対1の関係になっており、集合の中から1つの結果が選択されたという解釈は生じないと考えられる。このことから(7)のように、対立する命題が存在し、一見結果の集合が想起されて

いるように見える文脈でも、原因から結果を導く場合には、「人は体調が悪ければ、早退する」といった知識を基に、「トムは体調が悪かった」という前提から「早退した」という結論が導かれるので、2つの命題は1対1に結びつく。その結果、命題の集合が想起されず、that節内の命題が集合の中から選択されたものとして解釈できないことになる。これは(3)に示した *it is that* 構文の認可条件に違反するため、結果を表す *it is that* 構文が不適切になるといえる。

以上の考察から *it is that* 構文の that節内の命題が結果を表す場合には、想起された命題集合の中から選択されたものとして解釈できないため、通常用いられないといえる。

3. 説明

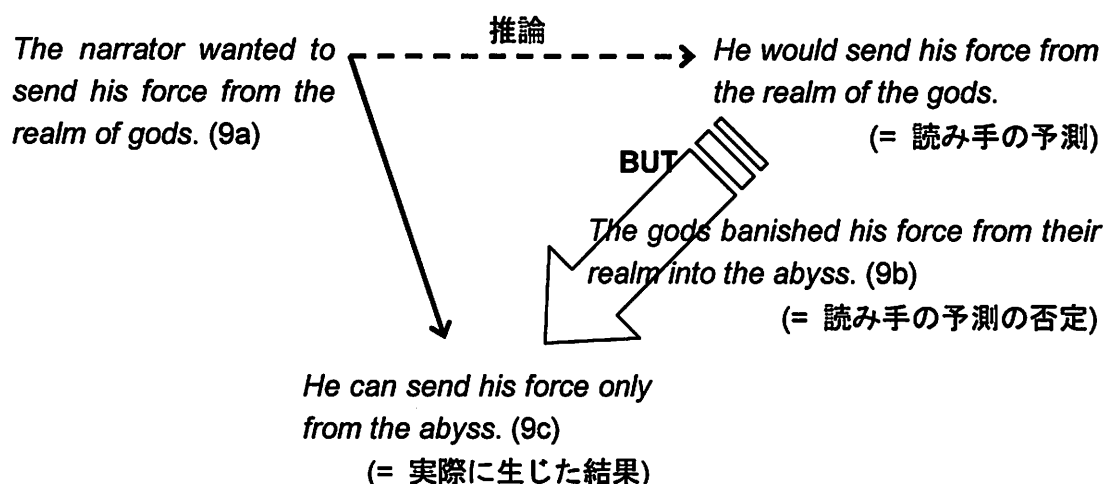
2節での議論を前提にすれば、推論の特性上、通常結果を表す *it is that* 構文は不適切になってしまう。それにもかかわらず、(2)の文脈では結果を表す *it is that* 構文が適切である。この事実は、前節で提示した *it is that* 構文の認可条件である(3)に基づけば、談話構造上 that節内の命題が想起された命題の集合から選択されたものとして解釈されるため、適切になっていると予測される。以下では、(2)の文脈を詳しく分析することで、実際に文脈上集合が想起され、その中から that節内の結果を表す命題が選択されていることを示す。はじめに(2)を(9)として再掲する。なお、分析の便宜上、例文を3つの部分に分けてある。

- (9) a. I wanted to give strength to human beings so they might establish themselves as equal to Lucifer; and had I remained in the realm of the gods this would have happened at the very beginning;
- b. but the gods wanted to be the rulers on earth, so at one point they had to banish my force from their realm into the depths of the abyss.
- c. So I wouldn't strengthen human beings too strongly, and thus *it is that only from this place am I capable of sending my strong force to the earth.*

(= (2))

はじめに、(9)の談話展開を順を追って確認していく。まず(9a)では語り手が神のいる領域から人間に力を送りたかったという趣旨のことが述べられている。そのため「私たちは何かをしたければ、それをする」という知識に基づき、読み手は「語り手が神のいる領域から人間に力を送った」という結果を予測する。⁶しかし、この予測は続く(9b)の *but* によって否定される。つまり、語り手は、神が自分の力を彼らのいる領域から奈落の底へと追いやったと述べることで、もはや自らの力を神の領域から人間に送ることが

できなくなったということを伝えている。そして、(9c)において、最終的な語り手の現状として、「奈落の底からしか自身の力を地球上に送ることができない」という結果が *it is that* 構文の形で述べられている。この談話展開は以下の図のようにまとめることができる。



(9)の *it is that* 構文の *that* 節内の命題は直接的には(9b)で述べられている命題内容（神が語り手の力を奈落の底へと追いやった）から導かれる結果を表しているが、ここで注目すべきは、同時に *that* 節内の命題は、(9a)で述べられている「語り手は神のいる領域から力を送りたいかった」という事態と譲歩の関係になっている点である。つまり、「語り手は神のいる領域から力を送りたいかったが、実際には奈落の底からしか力を送ることができない」という解釈が得られる。このように譲歩の解釈が得られる場合、それと同時に前提部分（＝「神の領域から力を送りたいかった」）から通常予測される事態の存在が含意される(cf. Oversteegen (1997))。つまり、その含意される事態とは、(9a)で「語り手は神の領域から力を送りたいかった」という前提から読み手が予測する「語り手は神の領域から力を送った」という結果である。このことから、(9)の *it is that* 構文が用いられる際には、「語り手は奈落の底から力を送る」という *that* 節内の命題に加え、「神の領域から力を送りたいかった」という事態から通常予測される「語り手は神の領域から力を送った」という命題が同時に存在し、命題の集合が想起されていると考えられる。*that* 節内の命題はその想起された命題の集合の中から選択されたものとして提示されることになるので、(3)に示したこの構文の認可条件（*it is that* 構文の *that* 節内の命題は先行文脈から想起される命題の集合の中から選択されたものでなければならない）を満たす。そのため、(9)では結果を表す *it is that* 構文が認可されているといえる。

以上、通常はその推論の特性上、結果を表す *it is that* 構文が不適切になってしまうが、

(9)では語り手の語りの内容から結果の集合を読み手に想起させる文脈となっているため、結果を表す *it is that* 構文が適切になっているといえる。

4. まとめ

本稿では、通常用いられない結果を表す *it is that* 構文が認可される仕組みについて考察し、それを明らかにすることを試みた。ここでは Ikarashi (2012)の提案に基づいて、*it is that* 構文の表す結果が先行文脈から想起される命題の集合の中から選択されたと解釈できる場合、結果を表す *it is that* 構文が認可されると主張した。

なお、本稿では結果を表す *it is that* 構文が許される例を1つに絞って論じてきたが、同じく結果を表す *it is that* 構文は他にも観察される。そのため、同じように結果を表す *it is that* 構文が認可される例においても、本稿で提示した認可条件を基にした分析が成り立つか、さらに考察を進める必要がある。

注

1. *it is that* 構文の形式的な特徴の一つとして、*it* が特定の指示対象を持たない虚辞であることがあげられる(Quirk et al. (1985), Delahunty (1990))。そのため、(i)の斜体部分のような *it* が特定の名詞句(a bit of a problem)を指示する場合と、*it is that* 構文は形式的に区別される。
(i) I've got a bit of a problem. *It is that all the banks are closed.* (Otake (2002:142))
2. 本稿では、大竹 (2009)で提示されている例文は用いない。大竹の例はいずれも実例であるが、引用が短く、談話展開を分析することが難しいためである。
3. *it is that* 構文の前に So I wouldn't strengthen human beings too strongly という一文がはさまれているが、*it is that* 構文はこの一文と直接的な因果関係を形成するわけではない。この一文は内容的には *it is that* 構文の *that* 節内の命題と等価であり、*it is that* 構文は言い換えの関係になっているからである。そのため、この一文を省略しても *it is that* 構文と先行文脈の結束性は保たれる。
4. もちろん(3)だけが、*it is that* 構文の使用を決定しているわけではない。その他の要因については Ikarashi (2012)を参照されたい。
5. 例えば「道路が濡れている」という事態を認識した場合、その事態を引き起こした原因として「誰かが水を撒いた」「雨が降った」「水道管が破裂した」など複数の原因が考えられ、原因の集合を形成する。そしてこの集合の中から最も妥当と思われる原因を結論として選択する推論がアブダクションである。
6. (9a)の2文目では仮定法かつ完了が用いられているため、この時点で読み手の予測が否定されることがわかるが、ここでは分析の考慮に入れない。

参考文献

- Allwood, Jens, Lars-Gunnar Andersson, and Östen Dahl (1977) *Logic in linguistics*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Bolinger, Dwight (1972) *That's That*, Mouton, The Hague.
- Cambridge International Dictionary of English* (1995) Cambridge University Press, Cambridge.
- Carlson, Lauri (1983) *Dialogue Games: An Approach to Discourse Analysis*, D. Reidel Publishing Company, Dordrecht.
- Delahunty, Gerald (1990) "Inferentials: The Story of a Forgotten Evidential," *Kansas Working Papers in Linguistics* 15, 1–28.
- Ikarashi, Keita (2012) "The Discourse Function of the *It Is That*-Construction: From the Perspective of Reasoning Process behind Discourse Flow," *Tsukuba English Studies* 31, 65–84.
- Koops, Christian (2007) "Constraints on Inferential Constructions," ed. by. Günter Radden, Klaus-Michael Köpcke, Thomas Berg and Peter Siemund, *Aspects of Meaning Construction*, 207–224, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
- Otake, Yoshio (2002) "Semantics and Functions of the *It Is That*-Construction and the Japanese *No da*-Construction," *MIT Working Papers in Linguistics* 43, 139–153.
- 大竹芳夫 (2009) 『「の(だ)」に対応する英語の構文』くろしお出版, 東京.
- Oversteegen, Leonoor E. (1997) "On the Pragmatic Nature of Causal and Contrastive Connectives," *Discourse Processes* 24, 51–85.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey N. Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- 米盛裕二 (2007) 『アブダクション—仮説と発見の論理』勁草書房, 東京.